

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	旅人だった東山魁夷
Author(s)	盧, 濤
Citation	広島大学マネジメント研究, 23 : 1 - 1
Issue Date	2022-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052188
Right	Copyright (c) 2022 by Author
Relation	



旅人だった東山魁夷

国民的画家と讃えられる東山魁夷（1908-1999）の絵を楽しんでみると、彼は生涯旅人であり、絵画はその遍歴と心象風景の記録であることを改めて思い知らされる。

横浜に生まれ神戸に育つ東山は、港町に満ち溢れる西洋文化の匂いに慣れ親しみ、海の彼方に思いを馳せつつ憧憬し、運命的に常住の地から絶え間なく旅立つという人生の航路を辿っていく。

放浪癖があると自認する東山は、東京美術学校修業時代から、信州や甲斐を訪ね歩き、何の変哲もない平凡な光景に心底から感動を覚え、自然との会話、自分との会話を重ねていた。戦後日本画家として再出発した東山の名作「残照」（1947）や「道」（1950）は、千葉と青森への写生旅行から生まれたものともいうが、幼少期の淡路島や戦中応召した熊本での風景との出会いも刻まれるそれまでの旅路の心持ちの表れに違いない。後々の「青響」（1960）、「花明り」、「青い峡」、「年暮る」（1968）といった数々の名作も、四季折々の美しき日本風景と対面する記録であり、自然との会話の追体験の産物にほかならない。

東山の旅は青年時代のドイツ留学で西欧まで続く。ボッティチェリやデューラーなどルネサンス期の巨匠の作品に触れる中、欧州の体験で得られたのは、洋の東西に潜んでいる文化の普遍性への目覚めであると共に、日本美への認識を新たにすることであった。それは長い間続けられ、60年代の北欧旅行に70年代、80年代のヨーロッパへと、旅を重ねていった。そこから生まれたのは、西洋的でも東洋的でもあると感じさせる「映象」（1962）、「二つの月」（1963）、「晩鐘」（1969）、「白馬の森」（1972）、「緑響く」（1982）などなど、新しい境地を開いた一味違う絵たちである。

東山芸術の集大成は、10年間もかけて完成した「唐招提寺障壁画」であるとされる。第1期の従来の日本画である「山雲」、「濤声」（1975）などと、第2期の「黄山暁雲」、「桂林月宵」、「揚州薫風」の水墨画の連作（1980）から構成される。第2期の創作は70年代半ばからの三度にわたる訪中の結実であるが、それも鑑真和上や墨による独特の芸術表現をはじめとする異文化への理解を深めようとする心構えと真摯な態度を前提としたもののはずであった。

青、緑、白と、色とりどりの世界を見せてくれた東山芸術は、賞味期限のない永遠のものである。アカデミックコミュニティ言わば研究者集団（言うまでもなくこのマネジメント学会もその1つ）に共存する我々としては、旅人の東山に倣って、東山が自称する「遍歴徒弟」（ヴァンダールシュ）のように「求道の道」を歩み、それぞれの思索の道程の記録でもある、美しい「作品」を描いていこうではないか、と思う今日この頃である。

広島大学マネジメント学会 会長

盧 濤

2022年初春東千田キャンパスにて